

早さと正確さ 化粧の肝

大田明美 舞台メイク



短いときは5分。薄あいのわずかな時間で、立ちっぱなしのままメイクとヘアスタイリングを終えてスポットライトの下へ送り出す。再び歌声で会場を満たす出演者を舞台袖で注視。化粧が楽曲や照明に合っているか確認すること。早さと正確さ」と舞台メイクの肝を説明する。

スタイリスト歴35年。実家の美容室を切り盛りする傍



おおた・あけみ 1959年、南風原町生まれ。高校卒業後に東京で働きながら美容師免許を取得。同町で55年に母親が創業した「すみ美粧院」に20代から勤務。2004年から2代目として経営する。

ら、実演家からメイクとヘアセットの出張依頼を受けるようになったのは20年近く前。オペラの舞台を中心にプロ・

アマ合わせて2カ月に1度ほど、スタッフと共に公演へ足を運ぶ。

舞台用のメイクは手法も化粧品も一般用と異なる。

「強い照明があたるので顔の部位によっての明暗や前髪

の形状を計算する」

沖縄の女性は顔の凹凸がはっきりしている傾向があり、両目と鼻を結ぶ部分と唇下から顎まで、二つの逆三角の部位に陰影がでやすいという。そのエリアは明るめのファンデーションを調合して色を微妙に変えている。

また本番を円滑に進行するために「何より打ち合わせが重要」と強調する。

主催者から事前に公演趣旨を聞き取り。各演目の雰囲気、出演者のメインとサブを把握し、メイクをイメージする。当日はリハーサルを客席中盤で確認して本番に臨む。

「クラシックを歌うのであれば華やかさだけでなく品も必要。最後にお客さんと握手をするときを考えて、近くで見ても違和感が出ないようにしたい。ちょうど披露宴の花嫁さんぐらい」と舞台メイクならではのこつを説明する。

繊細な技術を求められつ

つ、スリット勝負の現場をこなすのに、本業である美容室での繁忙期のスケジュール管理が生きている。一番忙しい成人の日は早朝から約100人をスタッフ4、5人で対応。夏場から長期で計画を立てる。「それを毎年スタッフと乗り切っているから、舞台の仕事もできる」

事実、本番中の舞台裏は出演者や裏方スタッフが駆け回るほど慌ただしく、張り詰めている。円滑な連携こそがスタイリングの鍵。舞台裏が目まぐるしいほど、舞台の上がまぶしく見える。

「出演する方たちは舞台へ出る間際、人が変わったように華やかな表情でスッと出て行く。プロはすごい。その自信は私たちが信頼してくれている証しなのかな、と思う」。この一瞬の光景が仕事の手応えだ。

(学芸部・松田興平)

＝おわり